二次元ドリームノベルズ／PDF立ち読み版

小説 神楽陽子
挿絵 助三郎

第一章　王女姉妹の剣と魔法　006
第二章　シルヴィア調教　フェラチオレッスン　042
第三章　アリエス強姦　地下牢の酒宴　092
第四章　シルヴィア大輪姦　137
第五章　アリエス大輪姦　190
エピローグ　236

登場人物紹介

Characters

シルヴィア＝リーゼンハイム

魔法で強化されたビキニ鎧を纏い剣で闘う、勇敢なリーゼンハイムの第一王女。病床に臥す父王に代わり、国政も執る、真面目で責任感が強く美しい女性。

アリエス＝リーゼンハイム

レオタードに身を包み魔法を駆使して闘う王女。シルヴィアの妹で、我が侭な一面があるものの、基本的に優しい性格。

アモン

リーゼンハイムの支配を目論むミッドガルド帝国の皇帝。暴君として知られる下品な男。

ニブルヘイム

全ての魔物を統べる魔王。人間界支配を企む。

リベルク

ニブルヘイムの忠臣の一人。

ナイトメア

ニブルヘイムの忠臣の一人。

『第二章　シルビア調教　フェラチオレッスン』より

ミッドガルド兵が彼の腕を捻り上げる。
「ぐあああ！」
思わず「やめろ！」と声を上げそうになった。その気持ちを、冷静にならなければと鎮めつつも、無力な自分を歯がゆく思う。それでもできる限りのことはしよう。
（だめだ、下手に部下を動かせては……私が止めなければ）
シルヴィアは片膝を立てて目の位置を高くし、精神的苦痛は隠して笑みを綻ばせた。
「皆の者……私なら大丈夫だ、心配はいらない……」
身を切られるより辛かった。
せめて部下のいいたかったことの少しでも代弁してやる。
「人質を盾に、このような卑怯な振る舞い……恥ずかしいとは思わないのか」
「卑怯？　幼稚な考えですな」
アモンがコンコンと頭を指で小突いてみせる。
「作戦、というヤツでございます」
言葉をすり替えただけではないか。
「私がいれば充分だろう、他の者を解放しろ」
「いいえ。シルヴィア様の私に対する忠誠を確かめるのが先ですぞ」
シルヴィアはこの男に交渉を持ちかけることが無駄であることを改めて知った。アモンは最初から相手の意思には無視を決め込んでいる、せめてこの場で人質だけでも解放して

やりたかったが。
愚帝がおもむろに身を起こす。
「たっぷりと相手をしてもらいましょうか」
初めての男がこのような下衆とは。とはいえこのまま黙って抱かれるつもりはない。
(寝床なら隙もできるはずだ。そこで決めてやる)
寝室で二人きり、密着するとなれば、身体能力と運動神経に優れた自分が圧倒的に有利だ。剣がなくとも締め技や関節技で事足りる。
ところが、アモンは大広間の真ん中でシルヴィアの媚肢に手を這わせてきたのである。
「なっ⁉　アモン、貴様？」
ゾクリと悪寒が背筋を駆け上がった。
「せっかくの機会です、王女の初体験を、臣下の者に披露なさってはいかがかな？」
アモンは人質に見せつけるようにシルヴィアを横に向かせ、下乳に金具を合わせた青色のブラごと右の房を掬い上げた。
熟したスイカほどある肥大な肉塊だ、片手では到底支えきれず、脂が掌の外にも溢れていく。そうされて身を軽く感じるほど、彼女の乳房には重量があった。
「なんちゅうデカさじゃ、掴みきれんわい」
「くっ……？」
シルヴィアは初めて口ごもった。もとより彼女の胸は大きかったが、ここまで成長した

のには理由がある。ビキニ鎧で四六時中押し揉まれてきたのだ、膨大な刺激を糧にしてたわわになるまで実ったのである。
それだけに人一倍敏感なのだが、シルヴィア自身はまだその事実を知らなかった。
「ぐふふ、こりゃあ揉むのも一苦労ですな。どうですかな、シルヴィア王女？」
「な……何のことだ」
質問の意味がわからない。
「感じておるのかと聞いているのです」
馬鹿な。まして醜く憎いこの男に触られて感じるなど。
（そんなことが……くう？）
しかし肉体は指の動き一つ一つに何かを感じ取っていた。雄大な曲線をブラの上から撫でられるだけでも肩に痺れが突き抜けていく。
男のごわごわとした手が麓の側面を上に滑って、乳白肌と接触し、五本の指が熊手状に食い込んでくる。大きさに比例して数の多い神経が摩擦感を拾い集める。揉まれているはずが、逆に男の指をズブズブと呑み込んでいく圧倒的なボリュームだ。
心を強くして、果肉の中で小さなものが芽生えるのを抑えながら、シルヴィアは拘束された腕を捻って抗った。
「ここを、どこだと思っている……は、恥ずかしくないのか！」
そして無数の視線にハッとする。ミッドガルド兵がうすら笑い、家臣が不安げに見守る

この視線の中で。アモンのねちっこい搾乳が、シルヴィアの豊乳がいかにいやらしいかを白状させるかのようで、羞恥の導火線に火が点いてしまう。

「わかっておりませぬなあ、見せるのがよいのですぞ」

酷笑を張りつけたアモンが耳元で囁いた。

「それに王女、あなたも見られるのが好きで、そのようなはしたない格好をしていらっしゃるのでは、ないのですかな？」

「そんなわけ、ある……かっ、やめろ！」

ビキニスタイルでは赤みの差す肌も悶え汗も隠すことができなかった。じわじわと滲む汗がきめ細やかな肌に水気を与え、妖しくジットリと照り返らせる。

可能な限りの抵抗をと思って、背をのけぞらせ、柳腰をくねくねと捻るも、見た目には悩ましいばかりであり、捏ねられるほど乳肉が熱を帯びていく。

（ど……どうなっている？）

シルヴィアは羞恥に熱化する頭を冷やそうとするが、背筋を這い上がる、悪寒とは別のものに焦りを禁じえなかった。最初は嫌悪感と区別のつかなかった感覚だ。

今度は左の乳膨、アモンがゴム生地の中央に人差し指を突き立てた。

「この辺だと思うんじゃがのう、ひっひっひ」

その一点にシルヴィアはハッとした。もっとも鋭敏な部分に意識と疼きが集中する。王女は来る刺激を察知し、抵抗の意志をはっきりと示してから歯噛みしたが。

「それ以上触るな――あう⁉」
アモンの指が右に半回転し、薄生地に渦を描くや、ソプラノボイスが短く漏れた。乳房がこのサイズだ、ニップルもそれに見合った大きさがある。しかし輪郭さえ薄地に見えてこないのは乳輪に尖塔が埋没してしまっているからである。
柔らかな女肉の中で乳首が硬くしこっていく。自分の身体のことだ、頭頂が自力で出てこられないことは知っていた。乳輪の輪から穿り返してやらねばならない。
「く……あぐぅう」
神経が張り詰め、乳塊に熱痺がぞくぞくと広がっていく。弱みは見せまいとシルヴィアは横を向くも、家臣と目を合わせるや視線を床に落とした。
(皆の前でこのような無様……アモンめ、今に見ていろ……)
平静を装うも頬は恥じらいの色に紅潮し、威風も薄れ、刺激の入力に肉体は正直にビクついてしまう。果肉の天辺、
「あうっ⁉」
陥没した乳頭を小突かれると、熱っぽい吐息を抑えきれず、アモンがにやりとした。
「ほうれ、ここか？　ここじゃなあ」
正確な位置を知られた。薄生地の上から乳首の沈んだ溝を、爪で穿り返され、隠れた蕾を抓み出される。
「どこを触ってる、やめ……くっあああ」

乳膨の感覚が前方に細長く伸びていった。先端までビクン、ビクンと脈が通じ、血液と共に危険な麻薬が循環する。

そして自分で直視するのも恥ずかしい突起に瞳を細める。

「く、み……見るな……」

集まる視線が羞恥の刃となって心を刻む。間近で見るアモンは目を白黒させ、帝国兵も人質も言葉を失った。さっきまでは陰りも見せなかった王女のニップルが、今は薄地を鋭角に突き上げ、その存在を誇っている。

根元から天辺まで太さは親指以上、先端の震えは全身に伝染した。薄く横に伸びて乳肌に吸いつくバストストッパーが何もせずとも突起を圧迫する。

（く、くそ……）

シルヴィアは後ろで組まされた両手で硬い拳を作り、羞恥に耐えた。突き刺さるような視線をチクチクと感じる。それがミッドガルド兵の下卑たものばかりではなく、憐れみも混じっているのがつらい。

「これは愉快！　酪農国家の姫君だけあって、牛みたいな乳ですな！」

肌を隠すに隠せぬビキニスタイルがいっそう羞恥を燃え上がらせる。しかし家臣の手前だからこそ弱い姿は見せられない。見せるものか。

「はあ、貴様は……豚のような腹をしているがな」

「ハッハッハ、もっと肥えますぞ？　今夜は祝杯をあげねばなりませんからなあ」

完全に優位にあるアモンはシルヴィアの反抗に余裕を持って返し、愉快そうに右の突起も掘り返す。左右対称にそちらでも突き上がる。
「まったくデカイ乳首ですな。ふむ、コリコリとしとりまする」
「う⁉　や……やめろと、いっている」
あくまで虚勢を貫こうにも気力は確実に削がれていた。次第に声からは張りがなくなりキリッとした眉がピクピクと喘ぐ。背筋が粟立ち、無視できないほどに乳悦が存在を膨らませていく。
鎖骨の下から玉の汗が浮かび、果肉は押し揉まれるほど赤い熱を灯していく。
「ぐふふ、そろそろ具合がよくなってきましたか」
「馬鹿をいえ、貴様なぞに触られて……私が、はあ、そんな女に見えるか？」
肺が灼けて呼吸の緩急は乱れ、心臓が暴れ出す。シルヴィアが否定しようにも、肉体は官能の階段を昇り始め、傍目にも彼女の発情は明らかだった。
力の抜け落ちそうな肩の前に流れた金髪がアモンの醜い指に搦め捕られる。
「綺麗な髪をしておりますなあ、これも今日からワシのモノ……」
ベロリ。女の命とも喩えられ、誇りでもあった父譲りの白金色のストレートヘアを舐め上げられてしまうこの悔しさ。これほどの屈辱は初めてだ。
豚のような男に我が身を玩具のように弄ばれる無様な姿を、敵兵達に嘲笑されるのみならず、部下の同情と申し訳なさ、そしてわずかな諦めを孕んだまなざしが、今の自分がど

れだけ惨めな存在であるかを痛感させる。
（くそ……耐えるしかないというのか）
アモンはシルヴィアの背後にまわると、他の者にもよく見えるように王女の身をのけぞらせ、左右の乳頭を摘んだ。
「本当に柔らかいのう、ぐいぐい伸びおるぞ」
親指と中指でしこり勃つ尖塔の根元を括られ、鉤に曲げた人差し指で薄生地に浮かぶ乳口を穿られながら、胸の谷間がどこまで広がるか試される。ブラを縁取る金具が媚肉に食い込んでくる。
アモンの息が直接かかるうなじが逆立つ一方で、嫌悪感と同量の乳悦がたわわな果肉で醸成され、快楽電流の痺れに肩から肘、指の関節までも蝕まれていく。
咽を絞って恥声は押し殺すことができても、跳ね上がる鼓動は抑えきれない。
「ぐっ、う……んふう」
脂汗で粘りが生じ、愛撫はいっそうねちっこくなった。乳肌が広大なだけに、男の手をもってしても撫でまわすには時間がかかる、その一秒一秒がいやに長い。
せめて込み上げる官能に苦悶する顔は見せまいと、シルヴィアは俯いて、金色の目映いロングヘアを幕のように降ろした。碧い瞳に揺らめく涙の膜が視界をぼかす。しかしそのまま涙を零すことは許されない、王女の自分が泣いて誰が人質を救うというのか。
力の限り笑みを作り、不安に怯える部下達をなだめる。

「心配……するな。私が、これしきのことで……」
「シ、シルヴィア様……」
その交流が、民の心も掴めぬ愚帝には気に食わなかったようだ。
「ふん、いつまでも強情ですなあ！」
背中から王女を押し倒し、巨乳の曲線を大理石の床で潰して平らに広げる。目を血走らせたアモンは、後方に突き出された王女の尻頬を平手でバチンとぶった。
「あうっ⁉」
張りに恵まれているだけに瞬間的な痛みが鋭く、音が切れよく短く千切れる。
「よく見ろ！　お前らの大切な姫君は、もうワシのものなんじゃよ！」
バチン！　バチィン！
罪人に鞭打つ執行人のように両手を振るい、シルヴィアの流麗で真っ白な桃尻を、赤い手形で染めていく。痛々しい様に臣下が目を逸らし交流を絶たれる。
「勇ましいシルヴィア王女は乗馬が得意と聞きますが、どうですかな？　馬のようにケツをぶたれる気分は！」
腰から崩れて乳房の重量を支えきれず、突っ伏して、尻を高く支える膝も今に折れてしまいそうだ。アモンは加減を知らず無茶苦茶に打ってくる。
しかし傍目には痛々しく悲惨であっても、官能の大蛇が鎌首をもたげたシルヴィアの肉体は、平手の一発一発から激痛とは別のものも感じ取った。

汗かく肢体が小刻みに打ち震え、脳の後ろに忍び寄る黒波から逃れんと首を振れば、黄金色の髪が広く波打つ。何かが自分を呑み込もうとしているのを感じる。

「あぐぅ、んはあ！　はあ、こ、この……ッ！」

膝立つシルヴィアは金属製の靴でカツ、カツと床を鳴らし、背中では篭手を擦りあわせた。普段はさして気にならない装備がいやに重たい。力がふっと抜けていく。

尻をぶたれるリズムにシンクロして太腿もプルンと弾んだ。

（この程度の……平手打ちくらいで！）

そのはずだ。凶悪な魔物の攻撃に比べればどうということはないはずなのだ。それなのにシルヴィアは上半身を起こすこともできない。

大広間で這い蹲って尻をぶたれる惨めさ。人質を盾にした卑怯な脅迫に屈するしかない悔しさ。肉体のみならず心さえもダイレクトに打ちのめされる。

（貴様だけは許さん！）

負けてなるものか。今一度双眸に光を灯し、唇を引き結ぶ心強き王女。しかし陵辱はこれからが本番だった、真っ赤に腫れた大尻を見下ろしたアモンが満足そうに笑う。

「ぐふふ、ではそろそろ……姫様のアソコを拝見しようか」

無抵抗の女の尻をいたぶることで落ち着きを取り戻したらしい外道が、尻の谷間が挟み込む薄布に沿って指を走らせた。

（――――！）

悪寒がする。それも恐怖に限りなく近いものが。
「さっ、触るな！　アモン！」
股を閉じようとしたが、さしものシルヴィアも、痺れる脚では男の腕力に打ち勝つことができなかった。突っ伏したまま開脚を強制され、股布に浮かび走る秘めやかな縦溝を、鼻息も届く至近距離でまじまじと観察される。
「ほお……これは、これは。大胆な格好でございますな」
股上が浅くクロッチの幅も狭い、その上極薄のショーツ。股関節の機能を最大限に優先する代わりに露出過剰で、果肉の実りが豊かなせいもあり、尻の谷間の上半分が食み出している。
今のシルヴィアは視線にも恐ろしいほど敏感で、意識すまいと思うほど、ぎらつく男の眼が存在感を増して尻の曲線を舐め回してきた。
（くっ、悪趣味な……！）
見られている。その事実に羞恥が真っ赤に燃え盛り、頭蓋を熱化させる。
「では、そろそろ」
アモンが右サイドに指を引っ掛けると、柔肉のクレバスに股布がグニリと食い込んだ。
「ああう？」
その時になってシルヴィアは初めて気がついた。いつもとゴム生地の感触が違う。汗とは異なる粘性の汁気を帯びて吸いついてくる。

「もう濡らしておりましたか、せっかちですなあ！」
グイグイとクロッチを引っ張られる度、淫ら汁の粘着感がじわじわと布地の裏を這い上がってくる。信じたくはないが、性感帯は刺激の入力に正直な反応をしていた。
「ほほう！　こっちにも出てきましたぞ？」
女の中心で肉豆が膨張し、湿った薄生地に恥ずかしい突起を突き立てる。アモンがその先端を指でパチンと軽く弾いた。
「ひはぁあああ⁉」
たったそれだけで病的な痙攣が背筋を走って反り返らせ、仰向くシルヴィア。壺口で火花が散ったかのようだった。
「おっと、強すぎましたかな？　どれ、どれ……」
更に指の腹でグリグリと押し込まれる。快楽神経を凝縮したクリトリスはショーツの裏地と擦れて皮を剥がれ、発情汁で吸着する薄地が愛撫を執拗な摩擦に変換した。意志とは無関係に快美感が生成され、眠れる本能を揺さぶり起こそうとする。
シルヴィアは暴れる心臓を落ち着かせるべく、床に胸を押しつけるように背を弓なりに反らし、下唇に前歯を立て、脳髄をくすぐる黒い誘惑に抗った。
「ぐくぅう……ッ！」
「そう我慢せずに、素直に喘いでみたらどうです？　気持ちいいですぞお」
できるものか。憎き敵に嬲られ、それも家臣や自国の騎士が見守る中で。だが酷薄な皇

帝に容赦はなく、爪を立て、肉豆の根元を括れるまで摘んだ。
脳裏がカッと真っ赤に焼ける。
「ひぎぃいいいいい⁉」
太腿の小さな震えがブルブルと鎮まらない。愛蜜が滲出して股布に広がるのがわかる。
肩を上下させて呼吸を繋ぐシルヴィアは、疲れた横顔で後ろの男を睨み上げた。
「はあ、はあ……調子に、乗るな……」
「ワシは何も調子に乗っとらんよ。シルヴィア王女が勝手に感じておるだけでしょう」
そしてクロッチの一枚布を右脇に押しやられる。ひんやりとした外気が蒸れた股間を通過し、ゾクリと背筋に緊張が走った。横目で睨むも羞恥を禁じえない。
（く……そぅ……！）
紅を薄く塗ったかのような秘裂をアモンが舟形にこじ開けると、ぬかるんだ肉唇が大きな輪を咲かせて視線を吸い込んだ。小指大のクリトリスは赤く充血し、肉輪は粘性の雫を千切ることなくぶらさげている。
艶やかなサーモンピンクの肉洞が空間を埋めるようにヒクヒクと縮動した。
「ぐふふ、綺麗なピンク色をしておりまする」
ゴクン、と生唾を呑む音があちこちで重なる。それはミッドガルド兵のものだとは思うが、信じたいが、もしかすると臣下のものだったのかもしれない。
羞恥に心が萎縮して頭には熱がまわる。

強引に秘園を暴かれたのだ、普通の女性なら泣き叫んでいる。しかし王女にして気丈なシルヴィアは、暴力に屈することなく、凛然としていなければならなかった。
（この屈辱……必ず、必ず晴らしてやる……！）
恥辱に押し潰されそうな心を叱咤し、括られた両手の拳に力を込める。
「さあて、具合の方は……と」
いよいよアモンの指が一本、壺口に侵入してきた。異物感が肉輪をくぐり、浅いところをぐるりと旋回する。
緊張と戦慄に突っ張る肉体が溶け落ちそうになった。
「あはぁあ⁉」
腹の中でドクンと何かが力強く脈打ち、快感の小波を起こす。陰唇の合わせ目から蜜がトロリと溢れて粘りを増し、床についた膝が笑ってガチャガチャとブーツを鳴らす。
次第に大きく荒くなっていくこの波を乗り越えられるのか。
（な……なん、だ？　く……っ、カラダが）
忌々しい生理反応がアモンの愛撫から性感をキャッチし、拒絶に徹する脳に流し込んでくる。秘裂からポタ、ポタと雫が滴り、生温かい性臭がむわっと立ち込めた。
「くくく、やはりオマ〇コは女の反応が違いますなあ」
「貴様、どこまで――あぐう！」
魔物さえ勇ましく斬り伏せる自分が、男の指先一つに苦悶するなど。シルヴィア自身は

欲さずとも、女の急所に制御がきかず、更なる甘露を湧かせてしまう。
欲望の源泉、子宮では性的興奮が呼び覚まされていた。
「指を抜け……汚い手で、触る……な、うく！」
外からの刺激だけではない、身体の中から込み上げてくる快悦。体温が急激に上昇して五臓六腑が灼け、漏らす吐息は熱く色めく。ねとつく悶え汗が止まらない。
見ていられないのか、家臣が顔を背けて視線を落とす。王女もまた彼らの顔を直視することができなかった。
皆を励ます言葉も浮かばず、重々しい空気が流れる中、憎きアモンが高笑う。
「ぐっふっふっふ！　いい気味じゃ、さあて……」
アモンは指を抜くと衣服の下半分を脱ぎ捨てた。まさか。
（こ、ここで、このまま……？）
この男は人前でセックスまでしようというのか。そしてこのような悪趣味な宴において我が身の純潔が奪われるというのか。
「貴様っ、正気か！　くそ、無抵抗の女を嬲って、何が楽しい⁉」
「楽しいですぞお。ひっひっひ、さあ、シルヴィア王女！」
突っ伏して尻だけ突き出した開脚姿勢ではアモンの動向を探れない。拘束を振り解こうと身を捩り、竦む下半身に活を入れ、分銅のない左足で蹴りを放つ。しかし渾身の蹴りはでたらめの方向に飛んで虚しくもアモンを外れ、シルヴィアはこの一撃で体力を一気に消

耗してしまった。
「くっ、くはぁ……はぁ」
「ふふふ、身体が重いでしょう。特製の分銅ですからなぁ」
この脱力は魔法のおもりだけが原因ではない。肉壺がひとりでに蠕動して、愛蜜をクチャクチャと鳴らし、強迫観念にも似た衝動で肉体を屈服させたのだ。
「や、やめろ！　貴様なんかに……うぐ⁉」
肉びらがまろび出たところへ異質な肉塊を押し当てられる。
ズブズブズブ……！
「う、うぁあ、ああああ？」
鈍痛を引きずりながら、初めての拡張感が秘壺の奥へと伸びていく。聖域に汚らわしい逸物が侵入しているのか。
認めたくはなくとも分厚く硬い肉の塊が奥へ奥へと頭部を押し込んでくる。
「ハッハッハ！　いいですぞ、いい締まりですぞ、シルヴィア王女！」
犯される。強引に、それもこのような下衆に。王女シルヴィアの女の一面は心の中で悲鳴を上げていた。
（こんなやつにむざむざ身体を許すなど……！）
屈辱に涙さえ滲ませる。しかしそれを雫にするより先に、シルヴィアはカッと目を見開いて瞬きも忘れ、長睫毛を静止させた。

『第五章　大輪姦』より

「んはあ！　あ……はぁ……」

膣が前方に寄っているせいか、太幹が恥骨を押し上げて無毛の土手がもっこりと盛り上がり、見た目にも挿入は明らかだった。アリエス自身、その不自然な膨らみに姦通の、胎内に異物を詰め込まれた圧迫感を確認させられる。

観衆の視線もそこに集中している。

（やだ、こんなの……は、恥ずかしくて死んじゃう……）

彼らのまなざしを通じて、ひどくいやらしいことをしている己の背徳性を思い知らされる。この衆人環視の中で。

にもかかわらず、少女の初心な肉体は姦通の達成感を満喫するかのように打ち震え、彼女が淫らに感じてしまっている事実は、観衆の目にもはっきりしていた。

「ふぅ、はあ……あ、はあ……？」

とろんとした春声を漏らしてアリエス自身もハッとする。沈みゆく夕日を映す瞳は陶然とし、眉は八の字に傾いて、美唇は慎ましさも忘れてだらしなく輪になっていた。相貌を滑るように這う精液が涎と混ざって豊乳に滴り落ちる。病的な痙攣がツインテールの毛先を休ませず、華奢な肩が断続的にビクンと跳ねる。

（あっ！　やだ、アソコが……キュウって？）

幼さとは裏腹に秘壺はむしろ挿入を歓迎し、肉襞を総動員してしゃぶるようにペニスに絡みついた。剛健な怒張との摩擦からとは信じられないような、蕩けんばかりの快感に理

性も溶かされていく。自然とアリエスの腰が浮いて、沈んだ。
「はあ――はあっ、んはあっ！」
水平に開いた太腿を弾ませて肉柱を昇降する。
ヌチャッ……ヌチャッ！　ヌチャッ！　ヌチャッ！　ヌチャッ！
剛直を包装するビスチェの伸縮性が反動を加え、最初は緩やかに抑制も利いたピストンが、次第にバネでも仕込んであるかのように瞬発力を連続させる。
信じられない。けれども。
「あっあん！　んあ、あはあぁん！」
気持ちいいのだ。秘粘膜と薄生地の二層構造が、肉棒との大きな摩擦にざらつく小さな摩擦を乗せ、官能の麻薬を神経から溢れるほど大量に生成する。
まさかとは思っても。
（お姉様も、こ、こんなの感じさせられたの？　――あ！）
理性を無視して肉体は昂り、子宮は存在感を増して「もっともっと」と渇望する。もう一人の全く別の自分に我が身を奪われるかのような感覚だ。
「ちっ違うの、は、んはぁあ！」
巨乳を肉感たっぷりに躍らせて、乳頭をヒクヒクと疼かせ、ビスチェを腰で捻って脱水させる。これではどうにかなってしまいそうだ。
（だ……だめ、気持ちよくなっちゃ、だめ……ッ！）

暴れ馬を鎮めるようにアリエスは肉体を叱咤した。肉茎が外れそうになるまで腰を上昇させ、量感に恵まれた汗みずくの尻を後方に突き出す。
「はあっ、はあ……んはあ、はあ……はぁ」
しばらくこうして動悸が落ち着くのを待とうとしたが、しかしその時間は許されなかった。
魔王が鋭く睨んでくる。
「こんなペースでは朝がきてしまうぞ。他の穴も使え」
「他の……あ、穴？」
地下牢であの辱めを受けたアリエスは、それが肛門であることをすぐに理解した。
このままもう一本を挿入しろというのか。
（そんなことしたら……）
しかし身を粉にしてでも民の命を救いたい。アリエスはつるんと丸く張った尻頬に両手を重ね、指を這わせるようにして谷間を広げた。渓谷の底に薄布が見えてくる。冷えた外気が恥部の過熱をより知覚させた。
粘性の混合物が尻布の裏側で薄く広がるように流動する。
「ひはぁあ……！」
それだけでも震えを禁じえないほどアリエスの肛門一帯は感度を高めていた。地下牢での肛虐で「開発」されてしまったのか。女穴に巻き込まれた分、ビスチェが縮んで尻布が

右脇にずれ込む。後ろにまわり込んで秘密の穴を覗き込む者も現れ始めた。
ぼそぼそと話し声も聞こえる。
「姫様が……こ、このようなことを……」
少女が肛門性交などをどこで知ったのか、とでもいわんばかりである。アリエスが何をどうするか、男性国民は目を離せない様子で、小さくとも強烈に汚らわしさを意識させるこの穴を見られているのかと思うと、羞恥で脳裏が真っ赤に染まる。
（そ……そんなにジロジロ……見ないで……）
しかし肛門は人目も憚らずヒクヒクと疼く。アリエスはその両脇に指を添えた。遠くの女性達が、王女自ら広げんとする穴が排泄器官であることを知って動揺する。オルテガの巨木で開発されただけのことはあり、小穴はゴムのように容易く横長に伸びた。
「んっ……ふ、ふぅう」
そこから黄ばんだ汁が細かい泡を噴く。王女のアナルはこの時を待っていたかのように、ぽっかりと輪に広がったまま、括約筋に熱痺を走らせて拡張を維持した。
一人の男が構えた怒張をその入り口に押し当てる。穴の円周へと逸れてなかなか的の定まらない剛直の接触に、アリエスは乱暴な挿入の気配を感じた。
「ひ、姫様……そっ、それでは、俺から」
「うん、大丈夫だから……挿れ、て――んはあ！」
二度目のアナルファック。入れられた、というより、むしろ最初から中に入っていたか

のように異物感が膨れ上がった。痛みは欠片もなく、原始的な生理快感を伴う肛門挿入に淫らに打ち震えてしまう。

ズチュズチュズチュ！　ヌチュッ！　ヌリュリュリュリュリュッ！

こちらの穴も熱硬いペニスを歓迎して、うねるように抱擁し、器官の長さを駆使して苛烈に吸引する。アリエスの肛門は立派な性感帯と化していた。

「あ、ああ、あああああ……！」

まだ刺激に慣れない肉壺とは違って牡の猛りがありのままに伝わってくる。独特の角度のついた弓なり、そして今にも精を吐きそうな脈動。直腸に潜った頭頂は尾てい骨の下にも届き、そこから力強く反り返ろうとした。

肛悦に悶える身体を爪先だけでは支えていられず、また腰を降ろしてしまう。すると蜜壺でも薄布にくるまれた剛直が張りを増し、今度は少女の体重も乗せて子宮口まで滑り込んできた。前後で淫猥な拡張感が競いあう。

「あはぁあん！」

クロッチの脇から白濁が沸き立ち、菊皺がなくなるまで広がった肛門からもピュッと小さなしぶきが上がった。悦痺の渦巻く双穴で甘美な法悦が充ち満ちる。

開脚姿勢で色っぽい吐息と涎を漏らすアリエス。

「これくらい、平気よ……だから、んはぁ」

国民に愛されてきたあどけない相貌が、ゲル状の原液にまみれ、白濁に薄汚れた朱唇に

は締まりがない。傾く眉尻が、長睫毛に縁取られた瞼を圧迫し、目尻からは、涙が零れてほの赤い頬を伝う。

虚空を見詰める碧い瞳はうっとりとして、民に余裕を見せようと笑っても、かえって卑猥なものにしか見えなかった。のたくる舌が落ち着かず、上下の歯列をぐるぐると舐めまわし、半端に湿ってほつれたツインテールを肢体に張りつかせて仰向く。

女性は絶句し、男性は食い入るように目を血走らせた。無言であってもまなざしは雄弁に彼ら、彼女らの心の内を語る。尊厳を踏みにじられ、強要された姦通であるのに、どうして感じているのか――と。それも膣と肛門、合わせて二本も男根を嵌め込んで。

「く……ふ、んくあ、はあっ」

恥ずかしい。そして惨めだ。衆人環視の中で自分の存在をひどく小さく感じる。糸を引く腐粘液がビスチェをぴっちりと吸着させて、若々しくも熟れた女体曲線の輪郭と陰影を明瞭にする。薄生地はとうに吸水力の限界を超えており、涎も精液も、汁気を奪われることなく豊満な肉体を滑り落ちていく。

無惨な姿だ、にもかかわらず、快楽の導火線には既に火がついたあとだった。張りの豊かな尻が肉茎を咥えたままブルブルと震え、瑞々しい太腿がたぷたぷと弾む。駆けるのを心待ちにしている馬のようにハイヒールの踵で地面を穿り返す。

（だめ……カラダが、ど……どうにかなっちゃう……！）

肉体がいやらしく変化していく。淫らな昂りがそのまま強迫観念となって今にも少女の

心を砕こうとする。荒れた呼吸にも鼓動にも自制が利かない。
「はあっ、んあ！　んふ、んっあはぁ」
国民を救うという目的が、手段にすぎないはずのセックスそのものにすり替わり始めていた。肉棒の味わい深さを無意識にも堪能してしまう。
（ち……違うわ！　私は、お姉様と……皆の、ため……に、こうして……！）
好んでしているものか、できることかと活を入れる。その時、肉食獣に囲まれたかのような危機感にアリエスはハッとしてうなじをゾクリと逆立てた。
（そうよ、皆のため――!?）
男性国民は双穴を塞がれて陶然とする王女の艶姿に眼をぎらつかせていた。地下牢で自分を嬲った、下卑たミッドガルド兵と同じ眼だ。か弱い女性を徹底的にいたぶることで欲求を満たす悪魔のような嗜虐性が潜んでいる。
（う……そ……！）
誇り高いリーゼンハイムの男達が。自分が命に代えても守ろうとした彼らが。無抵抗の少女、自分を相手に欲求を満たさんとしていた。
「待って、こんな……あっ！　んっあああ！　あはぁ！」
「もっもう我慢できるか！」
魔物どもの獰猛な雄叫びが彼らに後退の二文字を許さない。国の終焉を確信したのだろう、かりそめの快楽を求めて次々と手を伸ばしてくる。

「リーゼンハイムはもうおしまいだ、ど、どうせならやってやる！」
止められなかった。恐怖のあまり暴徒と化した国民も、そして、陵辱を歓迎する淫乱な肉体も。左右から口に向かって一本ずつ男根が急接近する。
「だめ！　み、皆――んっぐぅ⁉」
両方を掴んで押し止めるも、正面から突っ込んできた三本目に唇を奪われてしまう。アリエスは亀頭に上唇を重ね、広げた下唇からラズベリー色の舌を伸ばした。
「はあっ、順番……こんな、たくさんできないから」
「シルヴィア様みたいにすれば、ハア、いいんですよ姫様！」
指抜きであっても窮屈に感じる、汁の滴るグローブを馴染ませ、言われるがまま砲身を強く握るしかなかった。ドクドクと熱く暴れるような脈動が手首にも伝わってくる。美唇で赤腫れた亀頭を甘噛みするアリエスはつぶらな瞳に涙の波紋を浮かべた。
「やめて、女の人だって、んぐぅ、見てるのに……！」
妻や恋人を持つ男もいるだろう。母や娘を持つ男もいるだろう。なのに彼らは獣のような乱暴さを増していくばかりだった。
「見てる、からっ……むぐう！」
そしてアリエスも、いやらしい本性を開花させんとしていた。意志とは無関係に手首のスナップを利かせ、両手で左右対称にペニスの薄皮を剥き戻し、頬を丸く張らせてぶにぶにとした太肉を吸引する。

さっきが初めてとは思えないほど、彼女は絶妙な角度で両手をスライドさせた。いじらしく立てた小指を残し、他の四本は指関節が白くなるほど苛烈に幹を締めつける。
「んふっ……だ、らめ……んっ、んっんんう！」
灼けた吐息が怒張にぶつかって霧散し、鼻先にはきつい性臭が立ち込めた。引っ込んだ舌が口の中で鈴口を執拗に穿り、生唾と混合して独特の旨味を醸成する。
「んんっぶ、むふ、んっあむ」
腐肉をしゃぶるつもりなどない。しかし肉体の支配権を強奪したもう一人の自分が命令をくだす。たおやかな身は渇望に震え、だらだらと恥汗を垂れ流した。
ペニスがさらに膨張してもはや握り込めるサイズではなくなる。
「あっふあああんッ！」
女穴と尻穴でも鋼のように硬くなった剛直が出入りを繰り返す。群生する敏感な肉襞をグチャグチャにかきまわされ、結合部から際限なく溢れる甘露が開脚姿勢を濡らす。少女の粘膜器官はどれも真空パックのように吸いついてペニスを貪欲に咀嚼した。
男達は息を乱し、アリエスも、淫猥な摩擦感を反芻させられる。ビスチェのへばりつく柳腰が臍で「8」の字を描いた。
「ひはあっ、や、だめっ、こ、こんな、ひあっあふう！」
前後で男根の反りは逆、肉張ったエラが刺激に弱い秘粘膜をかき集め、神経がのたうつほどの快絶をばらまいてくる。更に脈動する肉茎が細かく跳ねて、膣圧と腸圧を別々にう

ねらせ、灼熱は五臓六腑を逆流する。
アリエス自身は腰を捻って、肉洞の全面に悦痺を伴う摩擦を行き渡らせる。
甘い衝撃がグラグラと脳を揺るがした。
（だ、め……たえ、らんない……！）
中毒性の強い麻薬が脳裏を満たしていく。それは粘膜器官で無限に生成され、合わせ目で薄生地を突き上げるクリトリスと、揺れ弾む肉釣り鐘の先端は正直に疼いた。
絶対に諦めてはいけない、妥協も許されない立場にあるアリエスの脳裏に底知れぬ絶望が忍び寄る。高まる官能を押さえるだけの気力はもはやなかった。
（ウソよ、はぁ、誰か、ウソって言ってえ！）
拒絶の意志を切り刻む肉悦の刃、理性は無惨に決壊し、荒れる感情がそのまま汁まみれの顔にも表れる。羞恥と屈辱、絶望と快楽でぐちゃぐちゃだ。
肉体は快楽にだけ忠実で、肉杭が外れるぎりぎりのところで腰を後ろにスイングさせ、抽送の軌跡と男根の反りを感覚で追いながら戻る。ビスチェのクロッチもろとも巨木を咥え込んだ幼い秘裂が発情汁を泡立たせる。
アリエスは無我夢中で亀頭を吐き出し、姉の名を痛切に叫んだ。
「お姉様……助けて、お姉様ぁあああ！」
シルヴィアならば助けてくれるはずだ。しかし姉はもういないも同然なのだ。
「お姉、さま……あ、あああ」

希望は絶たれた。最初から希望などありはしなかった。目尻から頬へと、腐粘液を二分して大粒の涙をぼろぼろと流す。その一方で、ビスチェの股布を巻き込んでミッチリと男根を咥え込む秘裂は、発情汁を湧かせて甘酸っぱい湯気を立ち昇らせた。

「あっ、ああ！　んはぁ、あっ、あひぃい！」

膝の屈伸運動が加速してタイツの生地を伸縮させ、股を水平に開いたままのけぞらせた肢体の上では、汚濁に濡れた巨乳が肩幅から零れるように弾む。獣欲にとり憑かれ、次々と手を伸ばしてくる男ども。

「ど、どうせ遅かれ早かれ、殺されるんだ！」

「俺だ、俺から先にさせろ！」

傍観する魔王が満足げに側近に命令をくだす。

「ふふふ、やはりこうでなくてはな。リベルク、手伝ってやれ」

リベルクは無言で頷くと、魔剣でビュウッと風を切った。

アリエスの視界がぐにゃりと歪む。

（――――!?）

自分を犯す男どもの隙間から別のペニスが生えた。それも十本、二十本と。リベルクの力によって空間が歪曲し、男達はアリエスに密着せずとも、欲望の汁を先走らせる肉砲を彼女になすりつけることができるようになったのである。

おぞましい光景だった。視界のすべてを男根に埋め尽くされ、足元からも角度を変えて

無数に生えてくる。まるで巨大な生物に丸呑みにされ、腹の中で今にも消化されるかのような閉塞感だ。

頭の上からも天井のように腐肉がずらりと並ぶ。発狂寸前のアリエスは、強張る瞳から涙を垂れ流し、嗚咽を漏らしながら、肉のプールに呑み込まれていった。

「ひあっ、や、やだ……うっ、うぁあ」

両手を広げて接近を妨げようにも、壁が迫ってくるかのような物量だ。ペニスは指の間に一本ずつ身を捻り込んで、出遅れた一本は肘の側からグローブの中をくぐって頭頂を掌まで運んでくる。指のほうが逆に挟まれて抜くことができない。

後ろからも無数の怒張が小さな背中を圧倒する。

「ひはぁああ？」

ケープを捲し上げ、背に肉の烙印を焼きつけてくる。さらにアリエスは、左右から接近する男根の群れによってハイヒールの踵が水平になるまで脚を持ち上げられ、体重のすべてを杭の挿さった女穴と肛門だけで支える姿勢をとらされた。

抗うつもりで膝を曲げると、腿と脹脛の隙間にも怒張が何本も滑り込み、また別の男根が左右複数、濡れそぼったタイツの裏側へと太腿半ばから潜り込んでくる。摩擦のすべてがグローブやタイツで引き締められる。

全身をペニスで押し揉まれる未曾有の性拷問。外の様子はもはやわからず、五感の対象は牡肉そのものだけに限定される。卑猥な疼きは全身、指先爪先にも伝染し、甘い痺れが

そのまま荒波となって今にも自分を押し流しそうだった。
（だ……め、もうだめ……）
かろうじて岸にしがみついたものの、指が一本ずつ剥がれていく感覚だ。快楽の流れる川下では百を超える男根がビクビクと蠢いて獲物を待っている。
それが比喩にならない状況だった。男性国民の数の多さにぞっとする。
肉の檻の中で男達の声が響いた。
「何もかもおしまいだ……やってやる！」
「膣内射精だ、姫様の中で出しまくってやるぞ！」
彼らの絶望は欲望にすり替わり、王女を嬲ることに最後の快楽を求めて勃起に血を漲らせた。うなじから首筋を通って、脇をくぐり、頬をペタペタとねぶってもくる。おさげは両方とも、歯車のように並ぶ男根の列に巻き込まれ、結び目から毛先がどう流れているのかわからない。鼻の両翼をなぞる二本が前髪をかきあげる。
「うぷっはぁ……やっ、やめ……んぁあ」
噎せ返らんばかりの性臭が充満し、息を継ぐたび嗅覚を突き上げた。可憐な妹君の幼い相貌をこそ汚したいという欲求なのか、顔面に次々と集まってくる。
「あはぁ、あ……うっぷ、んぷう！」
たわわに実った巨乳にも砲身を擦りつけられた。鎖骨の高さから脇腹へと、横乳に空間が許す限りの亀頭が連なり、豊かな弾力を圧迫してくる。しこり勃った乳頭も根元を男根

二本で括られ、吊り上げられるや、肉釣り鐘の下溝にも牡肉が群れて駆け込んでくる。胸の谷間にも一本といわず、二本三本と続いて薄生地を裏返し、女肉の流動を攪拌した。

甘美な乳悦が痺れるように突き抜ける肩でも怒張が並んでいる。

（だ……めぇ……！　こん、なの……）

脳裏の隅まで白濁した。男根で埋め尽くされた視界に桃色のもやがかかっていく。

（たえ……らん、ない……！）

忌々しかったはずの官能が本当に心地よくなるかのようだ。股の下でも剛直の群れはひしめきあって、小柄な少女を持ち上げて揺らし、一人の男に跨っていたはずが、今は交差する肉棒の上に座らされている。

尻の谷間を上から下になぞる一本が業を煮やしたのか、先客と尻布を挟む形で肛門に身を押し込んできた。

ズブズブズブ！　ミチミチミチミチミチ！

「んふぁああああッ⁉」

痛々しいほどに拡張を強いられ、アナル一帯が盛り上がった。入り損ねた別の数本が蟻の門渡りへと逸れていく。

二本の剛直は直腸で長さを競いあい、尾てい骨を間断なく突き上げた。蕩けんばかりの肛悦が脊髄にも抜け、全身を弾けるような悦痺に襲われるアリエス。

「あ――ああん！　あっ、あはあんッ！　ひっはぁあ」

豊満な肉体を前に、臨界を迎えたらしい数本がビュルビュルと白弾を弾き出した。女の肩から腐粘液が腕に流れ、開いた毛穴を埋めながらグローブの中まで浸透していく。

背中でも牡汁がドロリと幕を降ろし、タイツの裏でも、腐肉とは別の塊が薄地を膨らませて流動する。熱硬いペニスの感触に半固形の液体が混ざり始める。

小さな臍を狙って前方左右の三方から吐き出される濃厚なスペルマ。

ビュルッ！　ビュルビュル！　ビュルルル！

外れた白線がビスチェを新たに汚して、股関節の筋に沿って流れ、すべやかな肌と牡肉に粘り気を持たせた。果てた数は群がるペニスの百分の一にも満たず、排精して萎えるも、次の欲求を満たさんとすぐに鎌首をもたげる。

「あぁ……あ、ああ……！」

肢体を這う汁の流動にアリエスの理性はもう汚辱を感じ取れなかった。汁気はビスチェによって維持され、いつまでも少女を浸し続ける。ペニスの数はさらに増え、アリエスを囲んで醜くひしめいた。波のように押し寄せ、隙間からボディスーツの裏にも頭を潜り込ませてくる。

「ひはあっ、らめ、も、もう……らめぇええ！」

精液を吸った薄生地が粘って腰の括れに吸着し、女穴に陥没した股布もレッグホールを苛烈に引き締め、牡肉の擦過を最大限に感覚させる。左右とも、ずらりと並んでおこなわれる挿入に隙間はなく、逆三角形の二辺から腰の高さまで昇って尻布へと続いた。

ボディスーツが千切れんばかりに薄く伸びた上、歪曲した空間を通って、せっかちな肉茎が直接生地の裏へ入ってもくる。スーツとタイツの中で無数の幼虫が蠢いているかのようだ。しかもそれらは熱い汁を吐く。

「んくう、はあっあ、あ、あひぃあ」

精液をズルズルと引きずり、摩擦が硬くなったら新たに汁を足す。男根の大群に巻き込まれた紫色の髪からも白濁が漏出する。

熱く、生臭く、どろりと濃くて粘りを引くスペルマ。

（ど……どろ、どろぉ……）

ドロドロの精液。痛みでも苦しみでもない、被虐の中の快美感が、脳の後ろから少女の心を崩壊させる。絶頂以上の大渦に呑み込まれたアリエスは、自ら身を捩って指を細やかに捌き、溢れ返る汁感を堪能しながら瞳を笑ませた。

「あ――んはぁあああ……！」

大口を開いて甲高く牝の産声を上げる。そこに瘤肉を二個も捻り込まれたが、アリエスはむしろ欲してそれを咀嚼した。

「んぶぅ！　むっちゅ、んんむ……んむっふ」

愛らしい頬の輪郭を膨らませて台なしにしながら、心地よさそうに目尻をさげて眉を八の字に倒し、涎と精液の混合物を鼻にも逆流させる。意識的に肛門括約筋を緩めて、締めて、尻の穴でも二本を吸引する。滲出した腸液を押し流すように汚濁が尻の谷間を跳ね上

がり、ビスチェにゲル状の汁感を供給する。
片手に四本ずつ肉茎をかき集めるように指を絡めて、拳を固くした王女は、しなやかに手首を返しつつ、腰を前後にスイングさせた。
「あはあん！　んぷっ、い、いいのっ、はあっんむう、はぐぅ」
腐肉のプールで水遊び、汁遊びに夢中のアリエス。
「しゅっごいの、んふ、気持ひいぃのお！」
あちこちで噴く精液を満面の笑顔で浴びながら、鐘を打つようにして巨乳を弾ませ、身を捩り、ビスチェの裏側に入り込んだ数十本ものペニスを一度に締めつける。それだけの肉茎で羽交い締めにされながらも、腰を器用に振り、ぬかるんだ肉壺を熱化させる。
ヴァギナで剛直もろとも咥え込んだ薄生地が、豊かな伸縮性と反動でストロークを勢いに乗せる。子宮がボコボコとマグマのように煮立ち、剥け出てしこり勃つ女の性感帯は病的な喘ぎにのたうちまわる。
「あっはあああん！　もっほ、んぢゅる、んはぁもっとお！」
目的など忘れていた。どうでもよかった。
こんなに気持ちいいのだから。
「もっとびちゃびちゃ、んぷっ、ヌルヌルにしてえ！」
脳天からも降り注ぐスペルマのシャワー。耳の前にも後ろにもドロリと流れて、若い肢体を滑り落ちるも、リベルクの作った閉鎖空間から外に排出されずに溜まり、濁った水面

は少女の腰にも届く。唇で咥えた片方も勢いよく果て、口内を咽まで一気に満たす。
「んぐぅうう⁉　んむっ、んぢゅぅう」
捲れた唇から原液が溢れて鼻にも弾けた。
「むぅ……ん、んっぐ」
美味しい。
「んぶう、おいひ、ぃよお……せーえひ、もっと美味しいよお！」
アリエスはのたくる舌を休ませず、つぶらな瞳をうっとりと潤ませた。頻繁に小鼻を鳴らして淫気を吸引し、全身でペニスとじゃれあう。
唇から片方が外れても、強欲に別の一本で補い、咽を捻って熱く喘ぐ。
「はあっイク、んっぷ、せーえきで、い、イっひゃうッ！」
秘壺が縮動を始め、横長に拡張した肛門も窄まって太幹二本を食い締めた。子宮口と結腸孔でそれぞれ肉茎を吸い上げて、一番奥まで引きずり込んだら、双穴とも激烈なバイブレーションを極める。
「もぉイっちゃう――んぐっ！　むぐぅ！」
腰の反復運動が突発的に加速した。汚濁の水面を波立たせて、弾む双乳と相貌では牡汁をドロドロに浴びながら。
「あむっ！　っんぐ！　んふ！　むぐ！　むぅう！」
腰と対角線上に頭を往復させてマウスピストン。三桁にも上る数の男根も抽送を細かく

刻みながら、アリエスの体軀を浮かせた。
脳裏で火花が散る。神経が焼き切れるほどの快絶がスパークする。
「あっはあああああああぁぁぁあああああああああああああ――――――！」
絶頂を迎えた彼女を祝うかのように、百本超のペニスが一斉に精を吐き散らした。
ドビュドビュドビュドビュドビュ！　ブチュッブチュブチュブチュブチュ！　ビチャビチャビチャ！　ドクンッドプドプドプ！　ゴポゴポゴポッ！
濁った水面がみるみる上昇し、胸を浸して乳房を浮かせる。水面下の双穴でも、収斂を極める肉洞に搾られるまま怒張が一番奥で精を放った。
ビュクンッビュクンッビュクンッビュクンッビュクンッビュクンッ！
女穴と尻穴の女のしぶきが、閉鎖空間になみなみと溜まった精液を攪拌する。
まさしくプールそのものだった。
「んはぁあああああああああ……！」
蕩けるような快感に打ち震え、夥しい量の腐粘液に今にも沈みそうな顔を上向かせて恍惚とするアリエス。ビスチェの裏で排出された特濃ジェルもぶにぶにと蠢く。
達したまま降りてこられず、すべての感覚刺激が心地よく感じられる。
（せ、せぇえき……き……きもち、いぃ……ッ！）
快美感に陶酔して、唇は締まりのないまま、瞳を弧にしていやらしく笑う。
空間が正常に戻り、風呂桶が壊れたかのようにスペルマが外に溢れた。

エピローグ

リーゼンハイム国民にとって凄惨な光景だった。王位継承者として誰もが認めた王女シルヴィアが、魔物に玩具のように犯され、悦びに喘いでいるのだ。

「あっあはぁあ！　そこっ、マ〇コ、もっと突いてマ〇コッ！」

犯されるほど母乳を噴出するいやらしい肉体。白金色の髪も光沢を失って身体じゅうが魔物の精液と彼女自身の特濃ミルクでどろどろだ。バケツを満たす度に脳天から中身をぶちまけられ、熟れた肢体の隅々まで汚濁を流していく。

ビチャビチャビチャビチャ！

かつての気高く美しいシルヴィアはもういなかった。そこにいるのは、人外の化物と交わって、腰を淫らに振り、母乳を浴びながら恍惚の笑みを浮かべる一匹の牝。甘酸っぱいミルクをヌチャヌチャと鳴らして昂り。

何十回目もの絶頂を迎え、鍛え抜かれた肉体を伸びやかに反らして叫ぶ。

嬉しそうに。

「いいのぉ！　あっあはぁあああん！」

肥大化したニップルからビュルルルル、と白濁を噴いて、遠く放物線を伸ばし、微痙攣を走らせながら突っ伏す。そしてもう一方でも。

「はあ……もっと、もっとひてえ」
男性国民達によって、妹の王女アリエスが何十回と犯され続けていた。
「ひぁぐ、いいよお……オシリ、オシリすごくいひよぉお！」
突き出したヒップの谷間を、自ら後ろ手で横長に広げ、小さな肛門にペニスを二本も押し込んでいる。そうしながら、飴を与えられた子供のように別の腐肉をしゃぶり、うっとりと表情を緩ませる。
年齢を超越した牝の淫らな本性がありありと表れていた。
「はむぢゅ、チンポ好きぃ……んぐ、もっと……もっとあたしにびゅっびゅしてえ」
卑語を連発しては、潤む瞳で男達を見上げて要求し、欲張って唇でも二本、三本と涎を垂らして舐めまわす。愛らしかったツインテールも、細かくほつれて細身に複雑に絡みついており、もはや原型がわからず、髪の紫色も無茶苦茶に濁ってしまっている。
スペルマに独特の濁りと粘りは、若々しい肢体を完全に流れ落ちることなく、ビスチェとタイツの薄生地によって保持され、少女を犯された瞬間の姿なまま喘がせる。
「んぷ、んむ……ぐ、あむっぐ、んちゅ、んぢゅるう」
ビスチェはうっすらとピンク色を残して肌を危うく透かせ、同時に実り豊かな巨乳の揺れを絶妙な角度と幅で抑制する。
左手に肉茎を一本握りながらも、空いた右手が切ないのか、アリエスは股布の上から女壺をまさぐり、肛門で剛直二本を食い締めながら果てた。

「あひやぁあああああ！　気持ちいいよぉ、はあ、すぺりゅまあ！」
ビュルビュルと降り注ぐ汚濁を童顔で正面から受け、湯水で身を洗うかのように自分の手で、生臭い腐粘液を全身に塗り込んでいく。アリエスの肉体は新鮮なスペルマを浴びることで感じてしまうという卑猥な変質を遂げていた。
妹も何十回と果てた末、突っ伏し、堕落してから初めて姉妹は顔を合わせる。ふたりは四つん這いになり、姉は大量の母乳を、妹は大量の精液を引きずって距離を詰めた。
まだ人間の部分が心の片隅に残っていたのかもしれない、姉妹愛を肉悦で燃え上がらせ、お互いを呼びあう。そして間近で熱っぽく見詰めあう。
「ア……アリエス？」
「んは、お姉様ぁ……！」
シルヴィアは妹を抱き寄せ、腐粘液を舌で掬った。嗅覚が狂いそうなほどの腐臭を好んで嗅ぎ集め、唇を接触させてズルズルと汚濁をすすり、首筋まで舌の跡を伸ばしていく。そして妹の耳を甘噛みして囁く。
「あん、アリエスったら、羨ましいわ……精液でベトベトじゃない」
「ひはあ！　お、お姉様こそ」
アリエスもビクビクと敏感そうに震えて応えながら、潜り込むように姉の脇腹から首筋を舐め上げた。熟れた女体曲線を唇で丁寧になぞり、ツンと尖らせた舌頭で鎖骨の窪みから母乳を掬う。魔物の精液やらシルヴィアの体液やらが混ざり、濃度を増してドロドロだ。

「こんなに、んちゅう、甘くてぇ、美味ひい、んはあっミルクでいっぱぁい」
感触も光沢もヌルヌルにぬかるんだ肢体に手を這わせ、互いの汁を交換する。母乳の甘酸っぱさと精液の青臭さが混濁する。
二人の味覚はそれを「美味しい」とみなしたらしかった。シルヴィアは頻繁に舌で集めてゴクリと飲み下し、アリエスは母乳のドロリとした触感が楽しいのか、唇を広げてクチャクチャと、舌で中身をかき混ぜ遊ぶ。赤子が涎を垂れ流すかのようだ。
「もう、はあっ、アリエス……そんなに零しちゃだめよ？　んふ」
「はぁい、お姉様……んちゅ、んちゅう……はぁんぶ」
妹の可憐な唇に滴る指を差し込むシルヴィア。
それに甘えるようにしゃぶりつく全身精液まみれのアリエス。
身長差からアリエスの双乳がシルヴィアの、母乳を垂れ流す巨乳を押し上げる。妹はいやらしく瞳を光らせて、人差し指を鉤に曲げ、姉の乳口を左右同時に穿った。指先が中でのたうつ分だけ母乳が溢れて下乳曲線を滑り落ちる。
「ああっ！　アリエス、そんな……あふ！」
「お姉様ぁ、こう？　あぁん、気持ちよさそお」
少女の細い指さえギチギチと締めつける狭穴。それを浅い抻送に馴染ませ、乳腺を裏返して指を引き抜いたら、アリエスは自分の双乳を麓から掬い上げてみせた。
「今度はあ、んふ、あたしがお姉様のオッパイでしちゃぁう」

そしてビスチェを脱ぐこともせず、膨満した自分の乳頭を薄生地もろともその穴に押し込んでしまう。右も左も。
ズブ、ズチュズチュズチュ！　ヌチュヌチュヌチュ……ッ！
「あっはあああ⁉」
シルヴィアが背中にへばりついた金髪さえ翻してしゃくり上げた。アリエスもしこった乳頭で締めつけを堪能しているらしく、甘い吐息を漏らす。
「んはぁあああ……！」
肌の外に剥け出た女の性感帯を固く繋ぎ合わせ。細腰が砕けそうなほどの痺れを互いに伝達しあって、シルヴィアは乳腺で膨らむ異物感、アリエスは女でありながら、突起を挿し込むという男性的な挿入感に、二人淫猥な笑みを並べる。
「はぁ……お姉様のびゅっびゅするとこ、んく、あたしも見たあい」
「ええ、いいわ……はぁ、こ……こんなの初めてえ！」
姉のニップルが渦巻くように窄まって妹の頭頂を咥え込んだ。姉妹揃って肩を小刻みに震わせ、乳肉が変形するまで密着する。
「んはぁあああ……！」
更に相手の背中に腕をまわして離れはすまいと抱擁を極める。シルヴィアは妹の肩甲骨から背の筋をなぞり、アリエスも逆方向に手を這わせた。
唇と唇が触れ、二枚の舌が宙で戯れる。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
©KILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/